

佐世保市幼児教育センターの視察から

大分県本部／豊後大野市職員連合労働組合幼稚園部会

長崎県佐世保市幼児教育センター並びに佐世保市立幼児まどか教室「キンダーまどか」を視察し、事業を始めた経緯や課題、成果などについて意見交換をした。公立私立・施設種の別なく幼児教育と幼小接続の充実・向上に取り組んでいる幼児教育センターの事業内容は、本市でも取り組みたいものであり今後の指標となった。まどか教室は、幼児教育を軸に置いた通級教室であり、高い専門性が求められるため、開設にあたり並々ならぬ苦労があったことを聞いた。どちらの施設も、全国的に大きく取り上げられるよりも前から取り組みを進めてきたという点で、先見の明はもちろん、団結して行動する職場の力に感銘を受けた。

視察行程

- 15：00～15：45 佐世保市幼児教育センター施設見学・説明
- 15：45～16：30 まどか教室「キンダーまどか」施設見学・説明
- 17：30～18：30 意見交換（佐世保市職労、長崎県本部）

佐世保市幼児教育センター（白南風幼稚園に併設）について

幼児教育センターでは、まず事業について説明を受けた。事業内容は(1)教職員や保育者等の研修事業、(2)子育て相談・子育て支援事業、(3)幼児教育全般に関する調査・研究事業の3つで、2003年の開設からこの3事業を軸に据えることは変わっていないという。明確な目的のもと、何をすべきかが引き継がれてきたことがうかがえた。

事業(1)には4つの講座があり、特別支援教育講座はオンライン研修も行っている。実技講座は保育に今すぐ使えるものを取り上げ、長崎県の補助事業『学ぶ保育士応援研修』を活用しているという。現場の職員のニーズに沿った内容設定により、この事業がより意義のあるものになっていると感じた。また、既存の事業を活用することで無理なく続けていくこともできる。今回私たちが特に興味をもっていたのが保幼小連携講座である。この保幼小連携講座は、現在国が推進している架け橋プログラムに関わる内容だが、架け橋プログラムに至るまで幼保一元化、小1プロブレム対策、幼児教育振興プログラム（アプローチ・スタートカリキュラム）と、20年以上かけて対策を講じてきたことが、佐世保市では初期の頃に整えられている。連携に関する講演や要録に関する研修会により、ともに学ぶことはもちろん、公開保育・授業を行い、互いに参観し合う機会を設けている。参観後はグループ協議で考えを伝え合う場もある。しかし、小学校側に時間的余裕がないという課題もあるそうだ。

事業(2)は、幼児教育センター内に遊びのコーナー「きらきら広場」（子育て支援センター）があり、センターの職員とボランティアスタッフで対応している。建物の1階が幼稚園、2

階が幼児教育センターという構造になっており、吹き抜け部分から幼稚園が見えるため、「きらきら広場」の利用者は就園前に園の様子を知ることができる。業務内容は本市における子育て支援センターとほぼ同じであるが、幼稚園に併設されていることで子育て支援と幼児教育のつながりがよりスムーズになっている。

事業(3)は、カリキュラムの編成や情報発信のためのおたよりやリーフレット等の作成、そしてホームページやインスタグラムで発信している。その他、各種アンケートの分析をしているが、興味深かったのが中学生を対象とした「赤ちゃんふれあい事業」である。赤ちゃんに触れ合うことが中学生にどう影響しているのか追跡調査も行っており、保育士不足や少子化対策につながるのではないかと感じた。(調査内容は今後確認していきたい。)

事業の説明を受けた後、施設を見学した。「きらきら広場」、研修室ともに充実している。

佐世保市立幼児まどか教室（白南風小学校内）について

通級教室の幼児まどか教室については、業務内容に加えて開設に至るまでの経緯と短期間での研修について説明を受けた。

まず考えさせられたことが「幼児教育としての通級教室」であること。幼稚園教育要領の5領域に基づいた指導・支援を行うことが柱となっている。通常の発達支援センターや通級教室では個の特性に応じた「発達の専門家」としての丁寧な支援が行われているが、場合によっては領域が偏ることもある。そこに「幼児教育」を組み込むことで独自のカリキュラムが必要となりその苦労は並大抵ではない。県教育センターや子ども発達センター、大学等専門機関での研修に加え、先進地（長崎県西海市、熊本県熊本市）視察、国立特別支援教育総合研究所（神奈川県）・発達障害教育指導者研究協議会等での研修を1年の間に詰め込み、専門職としてのスキルを習得している。「幼稚園教諭に何ができるのか」との嘲笑を「通級教室を増設してほしい」という要望に変えたことに、これまでの努力がうかがえた。

（通級教室での指導・援助の内容は別紙）

そして、通級教室が小学校内にあることも、幼児教育としての硬貨を高めている。通常の発達支援センターでは外界からの刺激を極力遮断しているが、まどか教室は日常の小学校生活の音が聞こえるため、就学後の生活を感じることができる。保護者からも好評を得ているという。就学を見据えた5歳児にとっては特に、小学校に慣れるよい機会となっている。

まどか教室は、5歳児は週1回、4歳児は月1回の親子通所となっている。共働き家庭が多いなか親子での通所が難しい家庭もあり、課題となっているようだ。

意見交換会

○佐世保市職労より、佐世保市幼稚園廃止提案阻止に向けた取り組みについて説明
（別冊資料）

○豊後大野市の公立幼稚園・認定こども園の現状について説明

* 公立幼稚園の廃止、それに伴う職員の異動

○意見交換

- * 佐世保市の園児数について
- * 母子保健の立場から見た通級教室
- * 通級教室と児童発達支援センターの棲み分けについて
- * 公立幼稚園としての役割について
- * 幼児教育アドバイザーについて
- * 幼保小連携の課題

豊後大野市の現状と今後の取り組みについて

豊後大野市では、市内に 1 園残っている公立幼稚園を幼児教育センターとしているが、今できていることは未就園児を対象とした「子育てひろば」だけである。幼稚園部会ではその他に①就学前の 5 歳児を対象とした幼小交流の拠点、②豊後大野市における幼児教育の質の向上を目的とした研究・研修の拠点、③市内の幼児教育緒・保育施設に入園（所）できない幼児への受け皿となる施設（一時預かり保育も含めて）を考えていた。そして、幼児教育センターにはアドバイザーを 1 名配置し、中心となって①②を進めていくこととしていた。これについては教育委員会も同じ思いで準備を進めていたが、2024 年度の園児数が 7 人(年度途中から 8 人)だけであったことも起因して、幼児教育アドバイザーを幼稚園に配置することができず、代わりに子育て支援課に配置されている。

現状を踏まえて幼児教育センターとして果たせる機能について考えた。

まずできることは、豊後大野市における幼児教育の質の向上を目的とした研究・研修を担うことである。佐世保市のように幼小合同研修会が開催できるようになることが望ましいが、まずは、市内のすべての幼児教育保育施設の職員と一緒に研修する場をつくる。その手始めとして幼児教育アドバイザー連絡会議を開催する（2025 年 2 月 18 日に開催予定）。2025 年度は定期開催をめざす。市内の研修受講済みの幼児教育アドバイザーは 8 人、そのうち 5 人が公立園の職員である。私立こども園のアドバイザーからは、行政が主導してくれないとアドバイザーとしての活動をするのは難しいとの声が上がっている。公立園在籍の幼児教育アドバイザーが多いこと、行政に幼児教育アドバイザーが配置されていることで最大の好機となっている。この機を逃さず、進めていきたい。

研修の場が整ったら、幼小接続のための 5 歳児の交流拠点について提案していきたい。市内には 11 の小学校区があるが、そのうち 7 校区は 1 校 1 園であるため幼小交流の困難さは少ない。しかし、2 校区に幼児教育施設がなく、2 校区には複数園あり、就学先も広域となっている。交流は校区内の小学校としているものの、実際に就学する小学校との連携や、一緒に就学する友だちとの交流について課題となっている。各校区の幼小連絡会との連携を図ること、5 歳児同士の交流の場を設定することをめざしたい。

また、子育て支援の役割も欠かすことはできない。佐世保市のように子育て支援センターを併設することはできないが、当面の間「子育て広場」を継続していきたい。利用者が少な

いことが課題となるが、PR 方法の検討や直営の支援センターとの連携も視野に入れておきたい。加えて、相談支援についても考えていかなければならない。市の保健師や教育委員会と連携がとりやすいというメリットを活かして、内容に応じて専門の職員につなぐこと、状況によっては園へ様子を見に来てもらうことをシステムとして確立しておきたい。

そして、市にとって今後必要となるのが予想されるのが通級教室である。市内には民間の児童発達支援センターが1施設あるが、1日の定員は24人で、支援の必要な幼児と通所を希望する幼児が増えている中、通所できない幼児も多い。「まどか教室」のような公立の施設ができることが理想といえる。ただ、そのためには課題が3つある。

1つ目は人材の確保である。安心して預けられるようになるための専門的な知識とノウハウを身につけた職員を配置しなければならない。今いる職員が通級教室の業務にあたるのであれば、通常業務の合間を縫って学ぶ覚悟が必要となる。

2つ目は民間事業所からの理解を得ること。児童発達支援センターだけでなく、幼児教育保育施設への説明も必要となる。

3つ目は施設の整備だ。幼稚園で実施できることがベストだが、今の施設では難しい。

通級教室については、現場の職員と学校教育課とで協議していく必要がある。そのために、児童発達支援センターの状況や、通所でできていない幼児の状況等把握していくことを当面の目標としたい。

今回、佐世保市の取り組みを視察したことで目指す方向性が定まりつつあることは大きな前進と言える。しかし、それ以上に、佐世保市の先生方の熱意を目の当たりにしたことが今後の私たちの取り組みを支える力になると考える。市の子どもたちが必要と感ずることには苦労も厭わず実現に向けて取り組まれていた。働き方改革という観点からは逆行する考えになってしまうが、最終的に現状を打破できるのはこうしたマンパワーしかない。

そして、佐世保市幼児教育センターでは、子どもたちの健やかな成長を願うだけでなく、幼児教育に携わる先生方の支えとなることを常に考えている。公私問わず、子どものために働く先生方の思いや学びを支えていくことは公でしかできないこと。様々な研修で言われることだが、「先生が安定していないと子どもも安定できない。先生が楽しんでいたら子どもも楽しい」幼児教育施設で働く先生方を支えることは、子どもの健やかな成長を支えることにつながる。

佐世保市の先生方から学んだことを心に刻み、市内各施設の職員とともに豊後大野市の幼児教育を創りあげていきたい。

※レポートは2025年3月時点の内容で、現在は市内施設の状況等が変わっています。



幼児教育センター



まどか教室



意見交換会



(参加) 長崎県本部
佐世保市職労
豊後大野市職労